JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第32号
2020年3月11日発行
千葉県JICAシニアボランティアの会
chibajicasv02@gmail.com

本号目次

活動報告会	1-2
出前講座	3-5
会員便り New!	6
派遣国事情	7
JICA海外協力隊 家族連絡会 県庁表敬訪問 会員の動静	8

第28回活動報告会中止

2月14日（金）午後1時より、柏市のアミュゼ柏で、**最近**帰国したシニア海外協力隊**員**3名による、第28回活動報告会が行われる予定でした。しかし、国内で新型コロナウイルス感染者が確認されている状況に鑑み、直前の11日に中止を決定いたしました。大変残念ながら発表は行われませんでしたが、登壇予定の畑野郁子氏(アルゼンチン)、高崎忠信氏(カンボジア)、高田将之氏(チリ)の３名の活動報告を下記に掲載いたします。

通常総会開催日決定

本年の通常総会は、5月9日(土)、浦安国際センターにて開催されます。メールアドレスを登録されている会員の方には、４月中旬にメールで総会資料と共にご案内をお送りいたします。また、最近、PCを使っていないなどの理由で郵送をご希望の方は、その旨、ご連絡下さい。詳しくはSVニュースに同封の書状をご覧ください。また、総会に先駆けて公開講演会も行われますので、奮ってご参加ください。

「アルゼンチンでの日系日本語教育活動」

畑野　郁子

アルゼンチン、ミシオネス州、ポサーダス日本語学校で２年間日本語の先生をしました。

ポサーダス日本語学校は、日本人会で学校を運営しています。日本人会は、日本から移民した人たちによってつくられました。今は現地で生まれた２世が主力となって運営をし、生徒は３世と非日系の人たちです。

日本で暮らしている私たちにとって、南米はとても遠い場所のように感じることと思います。実際、私も、気持ち的にはアフリカより遠く、そこで生活するとは思ってもいませんでした。

でも、ポサーダスだけでなく、様々な場所に移り住んだ日系人にとっては、日本はいつも身近で、日本がルーツであることを誇りに思い、日本以上に日本の文化を子どもたちに伝えようとしています。

ポサーダス日本語学校は、アルゼンチンの北、パラグアイとブラジルに挟まれた、ミシオネス州ポサーダスにあります。アルゼンチンには、約20の日系日本語学校があります。ミシオネス州にも、ほかに３つの日本語学校がありますが、日系人のコミュニティがあるところに学校があります。ポサーダス日本語学校は、生徒数約60人、児童はほとんど日系人ですが、大人はほとんどが非日系人で、人数は半々です。日本語の人気はとてもありますが、生徒たちにとって、普段使う機会のない日本語を継続して勉強していくのは大変です。

私はここで日本語能力試験対策のクラスと習字や折り紙などの日本文化を教えていました。

日系人が日本語を勉強する理由は、親たちが日本文化、習慣、しつけなどを学んでほしいという思いで学齢期になったらとにかくみんな通い始めます。中には学校（日本語）が合わなくてやめてしまう子もいますが、太鼓の時間だけは来たり、日本語は興味はないけれど、友だちに会いたくて続けている子もいます。自分で興味を持って勉強してくれればしめたもので、格段に日本語能力が向上します。

非日系の生徒たちはアニメ、マンガやゲームを通して日本を知り、日本語を勉強してみたいと思って学校に来ますが、続けるのはなかなか難しいようです。毎年30人くらい入学して次の年も続ける生徒は5人くらいでしょうか。定着率は低いですが、続けている生徒はとても熱心で、日本語能力試験のN2を受けた生徒もいます。

生徒たちは日本が大好きで、いつかは日本に行きたいと思っている子たちがほとんどです。JICAの日本研修プログラムも日系だけでなく、非日系の人たちにも門戸が開かれ始めました。

いつの日か教え子たちに日本で会うのを楽しみにしています。

「2年間のカンボジア生活を振り返って」

高崎忠信

カンボジアの首都プノンペン、年がら年中暑い街で生活しました。平日はワイシャツと黒い夏用ズボンで自転車通勤。度無し２ドル眼鏡とマスクを着けて。休日は、いつでもＴシャツに短パンでＯＫ。気温は、朝も夜中も、雨が降っても、ほとんど変わらず。一番涼しかったのは、2019年12月、アパートの室温は２８度。体が気候に慣れてしまったので、不思議と肌寒さを感じていました。

道路は、バイクとトクトクと車に溢れてます。トクトクはバイクとリヤカーが一緒になった様な乗り物。フランス統治時代の広い歩道があるのですが、車の駐車場になっています。この喧噪の中、余りためらわずに道を歩ける様になるのに、１か月程度掛かりました。

活動は、政府関係機関でのコンピュータ利用支援。私なりに状況を判断し、努力しましたが、残念ながら十分な成果は得られませんでした。現地の方々はとても親切でしたが、私がクメール語を覚えられなくて、ほとんど会話が出来なかったので、現地の友達は出来ませんでした。

でも、NGO、NPOとして貢献されている素晴らしい日本人の方々にお会いするご縁があり、その方々の支援は続けていきたいと思っています。

プノンペンを訪れる際は、日本の寒い時期をお勧めします。現地では、乾季になります。暖かく（暑く）、生活コストも比較的安いので、短期間なら異国情緒を楽しみながら過ごし易いと思います。また、旬のフルーツを楽しみたい方には、4月、5月をお勧めします。

「チリ共和国の剣道事情」

高田　将之

１．チリの首都サンティアゴの概要紹介

チリは南米の西の端に沿って延びる細長い国で、人口は1,800万人程です。私が活動した首都のサンティアゴは、総人口の40%が集中する、スペイン統治時代の雰囲気が残る近代的な都市です。

２．チリでの剣道の認知度と愛好者

アニメや映画の影響で、「サムライ」の認知度は高いのですが、剣道については低いと感じました。剣道連盟の会員は250人で、経済的には比較的安定した人達でした。

３．チリの剣道愛好者の技術レベルと特徴

チリ人の最高段位は六段で３名、五段が４名いて、中南米では比較的高段者が多いと思います。又、チリでは剣道だけを練習している人は少数で、同時に複数の武道・武術を学ぶ人が多くいます。ここは日本と異なっています。

４．日本の武道・武術を学ぶ人達

彼らは剣道以外に、居合、空手、合気道や、杖道、薙刀、中には忍術を学ぶ人もいます。熱心な人は、日本の武道係大学に留学したり、或いは定期的に日本に行って練習したり、昇段審査を受けます。

私は以前から、居合は練習していましたが、チリで新たに杖道をチリ人の先生から学び始めました。

5. ボランティア活動を終えた感想

武道を深く理解する為、様々なアプローチをする人達を知れた事と、チリ人が惹きつけられる、日本の伝統文化の奥深さに気づかされた、素晴らしいボランティア経験でした。

出前講座レポート　（2019年8月～１１月）

うらやす市民大学本講座「開発途上国に学ぶ」 講義録

記録：うらやす市民大学コーディネーター　登内　明

第4回 「耐震用の試験装置製作で教えられたこと」

9月11日(水)　　講師　箕輪　親宏

１．ウズベキスタンの紹介

任国の地理、気候、民族、言語、宗教、経済などについて説明。またアレキサンダー大王の遠征にまつわる歴史遺跡、世界遺産の紹介を自身の写真を含め紹介しました。さらに、現地ロケが行われた日本映画の紹介、および遺跡発掘の日本とウズベキスタンの共同研究などについて触れました。

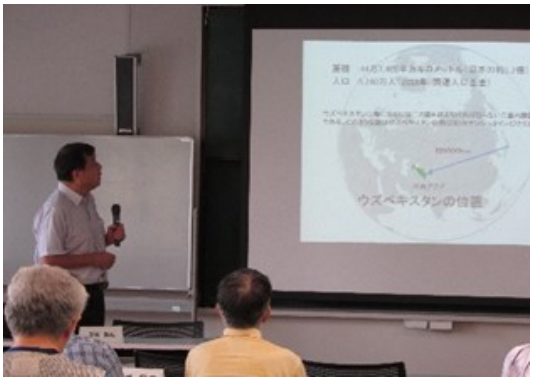
２．任国の地震災害について

1966年タシケント地震、1988年アルメニア地震を示し、演者自身が任国に派遣されるに至る背景を説明しました。

３．振動台による破壊実験紹介

動画を駆使して、実際にトリノ工科大学で行われた破壊実験の様子を説明しました。

４．気づきの提示



使用された試験装置は、殆どが現地の学生の手作りでありました。日本では考えられないことでしたが、これでも試験を行えることがわかりました。日本式の過剰ともいえるやり方を見直す機会を得られました。

プレゼン資料は随所にズーム機能や音声付動画が使用され、視聴覚に訴えようとした斬新なものでした。しかしやや専門的過ぎる内容や、タイトルに対するストーリーの展開に難があり、ポイントを絞りにくいとい**う**受講生からの意見がありました。次回以降、より良い講座とするための改善すべき反省点とします。

第5回 「コロンビア情勢と災害ボランティア 」

9月25日(水)　　講師　伊藤　義博

１．コロンビア事情について

コロンビア国について、地理、経済情勢、民族、生活環境などについて、4年間（2回派遣）にわたる自身の滞在経験を基にして、わかりやすく説明しました。

２．異文化対応

自身が特に印象を受けた文化について、日本と異なる点を説明しました。受講生からの多くの質問に対して、真摯に対応されていました。

３．活動内容紹介

2回の派遣での内容を紹介しました。ビルの倒壊の動画が印象的でした。

４．気づきの提示

講師は任国で異文化に接し、そこから日本が学べることを多数のキーワードを用いて提示しました。受講生には、日本の文化を再認識するヒントになったと思います。

講師の終始笑顔で軽快な語り方により、受講生は引き付けられていました。質疑応答も飾ることなく真摯な対応がなされ、講義終了後の受講生からのアンケートからもさわやかな印象を持たれたことが覗われました。講義全体として、高いレベルでまとめられていました。

第6回 「素敵なパラオの人々　」

10月９日(水)　　講師　中村　時夫

１．はじめに

講義はいきなりジョークで始まり、教室を和やかな雰囲気にしてから本題に入りました。自費でのーストラリア語学研修や、訓練所での経験など、JICAへ挑戦に至った自身の心境を説明しました。

２．パラオの紹介

地理、歴史、特に太平洋戦争の出来事を写真で示して説明しました。またパラオの人々との交流から学んだ異文化交流の原点を受講生にわかりやすく示しました。

３．活動内容紹介

数学指導にあたり、中学生に対して九九の重要性を認識させ、全国大会まで行ってきました。現地の教師に対する指導も併せて行いました。

４．帰国後の活動

JICAボランティア経験から得られた「人に喜んでもらうこと」を目指し、地域で保護士を行っています。落ちこぼれそうになっている中学生を助け、全員無事に卒業させました。

冗談を織り交ぜた講義は終始笑いが絶えませんでした。笑いの中でもポイントが押さえられており、受講生は全員が満足していた様子です。特に帰国後の自身の地域活動を説明する際は、受講生に近づいて話をされていたことに好感を覚えました。質疑に時間を十分とり、受講生とのコミュニケーションが高いレベルで取れていたと思います。

第7回「現地人の目線で日本を見つめ直す」

10月23日(水)　　講師　阿部　清司

１．アルゼンチンの紹介、その長所、日本との比較

アルゼンチンにあって日本にないものおよびその逆のものについて演者の現地滞在経験から述べられました。氷河、植物（ハカランダ）、動物（牛）など日本では見られない自然環境について説明されました。またマテ茶の作法について現地に同行した奥様から詳細な説明を頂きました。実際の道具も提示され受講生の理解を深めたと思います。友好的な国民性（アミギスモ）は日本の文化とかなり異なるものでありました。友情を示す最高のギフトは自身の愛用物であることには皆、驚いた様子でした。

２．現地人（学生）の目線で日本を見つめ直す

配属当初、学生との議論に際し通訳を介して行っていましたが、目線を合わせにくかったので、自ら現地でスペイン語を学び直接会話をするようにしました。しかし言葉は単なる手段であり、重要なのは真心をもって接することでした。

３．言葉の壁と開かれた心について

演者の著書や大学での学生指導経験を紹介され『草の根国際協力』のあり方を説明されました。 現地の自然環境の説明に重きが置かれていたので受講生はよく理解できたと思います。同行した奥様からも生活面での話があったので生活習慣の理解の助けになりました。現地の文化の紹介を行ったがもう少し踏み込んだアプローチが欲しかったように思われました。受講生からは途中で時間が不足したようだという意見がありました。

第8回「教育支援と学校音楽/モロッコ」

11月6日(水)　　講師　岡崎　英子

１．モロッコ王国紹介

アフリカ最後の植民地問題、日本との友好的な関係、王室などについて説明しました。

２．モロッコ人について

インシャアッラー（神が望むなら）、ビスミッラー（神の名のもとに）、ハムドウリッラー（神のおかげで）という神にまつわる表現が日常会話で使用されています。親切ではありますが、少々見栄を張ることを好み、無理をしない性格のようでした。

３．活動内容紹介

訓練所でのエピソードや当初の任国と任務内容がテロの影響で大幅に変更されたことなどを紹介しました。新たな任務に対しても真摯に取り組み、現地の中学校音楽教育に対して改善すべき内容を提案しました。

４．活動の振り返り

モロッコに限らず海外から日本を眺めると、日本だけが持つ特殊な文化があることがわかります。日本は世界的にはマイノリティに属するのかも知れないと思いました。講師はモロッコの民族衣装で講義に臨み、講義当初から受講生とは和やかな会話のやりとりがありました。

講義では大変に多くの情報を伝えていましたが、要領よく、また言語明瞭でありまたキーワードが明確でした。講師と受講生が常に一体となった講義であったように思えました。講師の任務・任地が変更されたが、それでも真摯に対応し、実績を残されたことを賞賛する発言が、受講生からありました。

● 2019年10月から2020年3月までに、以下の方々より当会に30,870円のご寄付がありました。
小松英世、箕輪親宏、高瀬義彦、上村實、伊藤義博、阿部清司、中村時夫、岡崎英子、中西陽典、三輪達雄、懇親会参加者有志。（敬称略）　大変ありがとうございました。

第9回 「開発途上国の人々から学ぶこと」
11月20日　　講師　渡辺　章

１．蚊の生態について

講師の専門である社会疫学から蚊の生態について説明し、日本でも発生しているデング熱についても言及しました。活動説明の導入部分として講義の理解を深めました。

２．駐在国活動紹介

アフリカを中心に多くの開発途上国に滞在して、予防接種などの公衆衛生を普及する活動を行ってきました。それぞれの国の人々の特徴などが紹介されました。シニアボランティアとしてはパプアニューギニア、ミクロネシア連邦で公衆衛生活動を紹介されました。

３．異文化理解について

日本ではほとんどなじみのない文化が多々あります。日本の常識は世界の常識ではないことを理解する必要があることを述べられました。

４．JICA活動紹介（いつか世界の力になれる）

ブータン、マダガスカル、セネガルで活動した隊員のビデオを紹介しました。

スライドで写真が多数使われ、説明がわかり易く受講生は理解できたと思います。異文化理解についても触れており、受講生が今後、地域で活動を行う際の参考になると思います。講師はアフリカを中心とした開発途上国で積極的に活動し、さらにまた新たな活動も考えられており、受講生は講師のボランティア精神に感銘を受けていました。

旭市海上公民館出前講座
「エチオピア：最も古い独立国、そして親日国」
10月17日（木）　　講師　小松　英世

24名（8割が年配の女性）の受講者を対象に講演を行った。 エチオピアについて、国勢に始り、人類発生の地、アフリカを分断しつつある大地溝帯、独立国としての長い歴史と伝統、かつて「日」「エ」の皇室間であった縁談の話、マラソンのアベベ選手、宗教と遺跡、食べ物の話など話され、あまりなじみのない異国の話で強く聴衆者の関心を引き付けた。

首都アジスアベバにおける水道局での派遣業務について、ナイル川の水源等水利的に恵まれた国が陥った水不足・森林の破壊、水源の不足、井戸掘りにおける根本的な間違いなどに関して行った提言と解決策について説明した。日本の援助では考えられない外国援助による住民不在の金儲けのための道路建設や水井戸掘削の例も紹介され、聴衆者の驚きを誘った。

最後に、体験談に基づいて、JICA海外青年協力隊とシニアボランテイア活動の変遷と動向について総括された。

協力隊設立時の理念、世情背景の違い、今後への期待を語り、そして、ボランテイア活動の社会還元も大切であるが、ボランテイア活動の前向きの姿勢と基本理念を忘れてはならないと力説された。（崎元）

柏市田中小学校出前講座
「パラグアイ、自然エネルギー利用と沢山の野鳥 」
11月18日(月)　　講師　高瀬　義彦

まず最初に、小学校の頃から「鉄腕アトム」の漫画を見て人間型ロボットへの夢を持った、パソコンが30歳の頃誕生、でも買えないので自作した、この経験で実力がつき、後にJICAボランティアの仕事に役に立ったと自己紹介された。

JICAの紹介では、開発途上国への国際協力を行う組織であり、派遣前訓練で初めてスペイン語を勉強し、「信頼で世界をつなぐ」、「人間の安全保障」、「文化相対主義」などの考えを教わったと話された。

パラグアイ国民の90%以上がグアラニー人とスペイン人との混血であり、文化もハイブリッド文化である、パラグアイの国民食は肉とマンディオカであることやテレレ（冷たいマテ茶）をよく飲む習慣があることなどが紹介された。

パラグアイには世界一の発電運用を記録したブラジルと共同運営する水力発電所がある、ここで働くエンジニアは赴任先のアスンシオン大学工学部で育てられることが紹介された。赴任先の電力・制御システム研究室では再生可能エネルギーの研究が行われていて、学生2人と一緒に太陽電池パネルの方向制御装置を開発する仕事を行った、パソコン自作の経験が直接役に立った、若い時に実力を身につけることが大事だと話された。

西パラグアイ（チャコ）は人が住まず、世界最大級の熱帯性湿地パンタナルに連続するため自然の宝庫であること、この入り口に旅行して見ることができた野鳥などが紹介された。アスンシオンの公園も自然豊かで沢山の野鳥と出会ったことが紹介された。（柏市立田中小学校　藤岡教諭）

会 員 便 り　会員のみなさまによるコーナー　投稿募集中!!

「最高の思い出の旅行とＳＶとの交流」

品川洋之助

任期中の思い出で最高のものは、「任国外旅行」であろう。年次休暇、健康休暇、週末などを利用して近隣の国に旅行を楽しんだ。

「イグアスの滝―家族旅行」

正月を利用し、アスンシオンに家族が集合し（日本より息子2名、米国留学中の息子と許嫁と我々計６名）ブラジル・アルゼンチン領内のイグアスの滝を１泊２日で観光した。JICA登録運転手日系の渡辺兄弟が運転する２台の車に分乗し、途中ItaipuDamを見学ののちブラジル領Foz de IguacuにあるBuorbon Hotelに check-in。翌日イグアスの滝へ、熱帯樹林の中を歩き。モーターボートに乗ると、滝の中に突っ込み全員ずぶ濡れとなり車内で乾かしながらその日にアスンシオンに帰着した。

「Puerto-montt(チリ)-Bariloche(アルゼンチン)
アンデス山脈横断」

パタゴニア地方の入り口プエルトモンより、東へ向かい、バスと船で国境を越え雄大なアンデス山脈を横断。南米のスイスといわれるBarilocheに至る。

「氷河観光」

SantiagoからCoihaiqueまで飛び,翌朝PuertoAisenから乗船し、南へ約 数時間航行し目的地SanLafaelに到着した。80人の船客は10人ずつゴムボートに分乗して氷河の先端が海に落ち込むのを至近距離で観察した。

「JICA SVとの出会い」

チリのサンチアゴで定宿にしていたHotel Nipponで、当時任期中の会員、山野辺恭夫氏（剣道・居合道、柏市在住）と初めてお会いし、現在も懇意にして頂いている。SVとの交流で欠かせないのは、任期が1年重なった西川信二郎氏（窯業原料開発、アスンシオン大学化学部セラミック研究開発グループ、現在、横須賀市在住）との付き合いである。私の指導科目：鉱物資源の調査・開発と関連があり、お互い情報交換しながら励ましあった。

（写真参照）

こうして休暇で知見・経験を広げ、SVとの交流を広げたことが、JICAへの感謝の思いとなり、帰国後、及川淳一氏（初代当会会長）の呼びかけに応じ、発起人代表となり、2003年７月当会設立、及川氏に次いで7年間会長を務めたのち、現在は会員として活動に参加している。

「エルサルバドルと詩吟の思い出」

渡邉要吉

2008年5月エルサルバドルに赴任した。これまで米国とスペインの勤務経験はあったが、中米に初めてJICA のSVとして行くことになった。

日本とエルサルバドルの関係は、現地に行って大使のお話で初めて知ったのであるが、満州国の承認をめぐって国連で議論の時この国だけは日本の主張に賛成したのでありました。戦後日本が復興し、ようやく海外に投資を開始した第一号はエルサルバドルであった。今でもこの国の人々は自国のことを「中米の日本」とよんでいる。曰く、国は小さいが人々は勤勉だと。確かに国は四国より少し大きい程度で、600万人ほどの人口だが海外で働いている人が２百数十万人いる。勤勉に働いて祖国の家族に送金する。

現地ではJICA主催の「日本文化紹介」が人気であった。青年隊が中心になりシニアも参加して各地で賑やかに日本文化を紹介した。赴任して間もないころ、私は詩吟を披露したことがあったが、その時、詩吟に大変興味を持ってくれた小学校の先生が、是非小学校で詩吟をやって欲しと言われたのだった。その先生は日本が世界で一流の活躍をしているのに、詩吟に見るような実直な世界を大事にしていることに感激しているという。私たちが小学校に行くと、担任の先生が私を紹介してくれて、「日本は戦争に負けて焼け野原になったが、勤勉な日本人は、今では世界をリードして行く存在になった。」と紹介してくれた。私はその学校で　朱熹作　偶成「少年老い易く　学成り難し　一寸の光陰軽んず可からず。　未だ覚めず池塘春草の夢　階前の梧葉　已に秋声。」について解説し、詠った。

JICAの宿泊施設が首都サンサルバドルにあり、地方の青年隊はここに良く宿泊する。私たちもここで一緒に稽古して本番に備えた。首都を眼下に見る此の施設で一緒に稽古したのも今は懐かしい思い出である。

詩吟の発祥は中国で、紀元前１１世紀ごろの民衆の歌を孔子は中国各地から集めて「詩経」を編纂し、「詩三百、一言を以てこれを言う、思い邪なし」と評している。漢詩は科挙の登用試験にも必須で、白楽天、李白、杜甫も官吏だった。

日本には平安時代に遣唐使などが持ち帰ったと言われ、戦国時代の上杉謙信、伊達正宗などの漢詩は今も歌われている。江戸時代に庶民に浸透し幕末から明治、大正、昭和、平成、更に令和と受け継がれてきた。エルサルの碧い空の下で詠った「城山」や「静御前」等も良い思い出となった。

（筆者は現在詩吟神風流総本部常任理事　総元代範　渡邉神熔名で活動中。）

派 遣 国 事 情　現在派遣中の会員、最近帰国した会員のホットな現地情報です。

ミャンマー

ヤンゴンでの共生について

職種　コンピュータ技術　　島中　一俊

ミャンマー派遣中の島中です。職種はコンピュータ技術で、職場はヤンゴンのダウンタウンから10kほど北にある国立のICT専門学校です。私の任務は、古くなったシステム開発研修コースを刷新する教科書の開発です。専門学校といっても侮ってはいけません。ミャンマーでは、高校の卒業試験の成績で入学できる大学が決まる制度で、コンピュータを含む工科系は医療系に次ぐトップ人気です。

配属先に入学するには、工科系またはコンピュータ大学の卒業資格が必要なので、とても狭き門ですが、さらに専門技術の入学試験があるので、学生はいわゆるトップエリートです。もちろん先生も博士号が求められます。実際、学生として大学や省庁からの派遣者も少なくありません。

ただ、学校の雰囲気は、日本とは全く異なります。実は7割方が女性なのです。さらに先生も、配属先の職員は50名程度ですが男性はほんの数名で、所長以下ほぼ全員女性！です。この環境だけではなく、日々とても刺激的な生活を送っております。（もちろん変な意味は有りません^^;）

話は変わりますが、ここからは現在私が嵌っているものをご紹介します。それは、ロンジーという男も女も履く巻きスカートのような民族衣装です。

とても奇麗な布で、それだけでも魅力的ですが、多民族国家らしく、民族毎にパターンや素材が異なり、知れば知るほど興味が湧きます。

しかも、店毎に品揃えや値段もバラバラなので、似たものもどこで買うかで値段が変わり、次に行った時にはほぼ無いので、目利きが必要になるのも嵌る理由です。ただ、このロンジー、タイトスカートのため汗をかくと纏わりついて常用するには慣れが必要です。（日本人は汗腺が多いのでしょうか？）実際、道路の横断等で危険を感じ、以来履くのは諦めたのですが、最近、溜まった布をシャツに作り直すサービスを見付けて活用しています。（今ならとても安いですし）いかがでしょう？ミャンマーに来て好みの一枚を探して歩くのも面白いのではないでしょうか？

ベトナム

みんなしあわせに暮らしています。

職種　再生可能・省エネルギー　　多田 ノブオ

ここはベトナム中部にあるグエン王朝があった旧都フエという地方都市です。

いま流行りの再生可能エネルギー（太陽光とか風力とかバイオとか）について、専門外の先生方に技術指導するという要請を受け、工業短大（高等職業訓練校）に赴任しました。ところが、先生方みなさん、学校にいらっしゃるのは授業や実習のある時だけのようです。勉強会に都合の良い時間を確認して、毎週1時間ほど数人で集まってみると、どうも授業のある時間に生徒を自習させて参加していることに、だいぶ経ってから気が付きました。

短大講師の給与は、当校の卒業生入社時と変わらないくらいだそうで、その他の仕事をやりながら、私なんかよりよっぽどボラ

ンティアで先生しているように見えます。

私の持論通り「（飢餓や戦乱地域を除いて）どんな国でも現時点でみなさん幸せに暮らしていて、我々は余計なお世話をしに来ている。」のを実感します。

ここフエの人たちは特にフエが好きで、ずっとフエで暮らしたい感じが強く、クアラルンプルやジャカルタなどのここ30年の変化を見てきた私は、フエは、ハノイやサイゴンのように都会にならず、このままフエでいるのが幸せだろうと思います。どういう家計か不明なのですが、一人1台の バイクとスマホを持って、家族といればOKです。

写真はダブルスマホの術。当校の学生さんたちは英語の教科書が読めるレベルではなく、PCを持っている学生も少ないので、英語の資料やウェブサイトを翻訳ツールで利用するように練習させています。日本語よりまず英語を勉強せい！と。

JICA海外協力隊家族連絡会

2020年1月19日（日）千葉県商工会議所研修室にて、JICA主催、千葉県青年海外協力隊OB会、協力隊を育てる会、当会共催の家族連絡会が開かれ、派遣中の隊員の家族、約40名が参加した。

海外派遣経験者、JICA職員との懇談会では、帰国隊員への対応、変化する海外の事情などに関する家族の心配事、相談事などに対し、経験者側が熱心に応答する姿が見られた。　(渡邉会長出席)

JICA海外協力隊千葉県庁表敬訪問

11月26日(火)、県庁で2019年度第二回JICA海外協力隊帰国・派遣に伴う表敬訪問が行われ、出発隊員１５名、帰国隊員5名(内シニア１名)と、関係者が出席した。 隊員紹介と挨拶の後、JICA東京高橋政行専任参事が、千葉県による累計二千名を超える協力隊員輩出、外国人研修生受け入れ等、JICA事業への協力に対し謝意を表明した。そして、千葉県総合企画部田中部長からは、帰国隊員への労いと、派遣隊員への活躍を祈念する激励の言葉が述べられた。（渡邉会長出席）

会員投稿欄新設

この度、なかなか会う機会の少ない会員同士の交流の場を作り出そうという趣旨から、皆様の投稿欄を新設しました。

今回は、1ページを割き、品川元会長、渡邉現会長に書いていただきましたが、次回は、全体を12ページにして、3ページに増加させたいと考えています。原稿のテーマは、随想、思い出、趣味、耳より情報等々、何でも結構です。自由にお書きください。また、「こんなコラムがあったら」等という提案も大歓迎です。

全会員の皆様と共に、魅力あるSVニュースを作っていきたいと思います。随時、ご投稿をお待ちしております!!

会員の動静

会員数　99名（2020年2月末現在）

2019年10月1日から2020年1月末日までの間に帰国された方は次のとおりです。（敬称略）

・石原 建男（富里市） ドミニカ共和国 理学療法士
・神林 恒男（柏市）　 コロンビア QC・生産性向上
・髙﨑 忠信（佐倉市） カンボジアコンピュータ技術
・高田 將之（船橋市） チリ　剣道
・畑野 郁子 (習志野市)　 アルゼンチン　 日本語教育

2020年3月1日現在の派遣中の方は次のとおりです。

・麻生 伸彦	(茂原市)	バヌアツ	コンピュータ技術
・岩井 潮里	(千葉市)	ソロモン	栄養士
・大西 和夫	(千葉市)	コロンビア	QC・生産性向上
・小澤　彰	(八千代市)	パナマ	数学教育
・島中 一俊	(千葉市)	ミャンマー	コンピュータ技術
・多田 ノブオ	(千葉市)	ベトナム	再生エネルギー
・田畑 成章	(柏市)	インドネシア	経営管理
・服部　正	(八街市)	コスタリカ	体操競技
・半田　滋	(市原市)	鉱業	コロンビア

● 各種イベント景品用の外国のお土産、活動報告会展示パネル用の写真は、随時募集しています。特に、最近ご帰国の方は、是非、お寄せください。宛先は、**chibajicasv02@gmail.com**です。
● 退会の際は、退会届を上記メールアドレス宛、書面でご通知ください。書式は当会ウエブサイトのトップページからダウンロードできます。手違い防止のため、ご協力の程、宜しくお願いいたします。